

当報告の内容は、報告者の著作物です。
Copyrighted materials of the authors.

「モンゴル諸語の言語変容：内的要因と外的要因」

(2019年度第1回(通算第3回)研究会)

Synchrony and Diachrony of Mongolic Languages: Internal and External Factors (The 3rd meeting)

日時：2019年6月15日(土)

Date: 15th Jun. 2019

場所：AA 研マルチメディア会議室 (304)

Venue: Room 304 (Multimedia Conference Room), ILCAA

Language: Japanese

通算第3回目の研究会となる今回は、2名の共同研究員に報告していただいた。報告は、1) モンゴル語のV1+V2構造のうちのV2に「補助動詞」が位置し、その補助動詞がアスペクト的意味を表わすケースの記述を試みた松岡による報告、2) モンゴル語正書法における子音間の母音挿入に関する角道による報告である。以下に2件の報告の要旨を記載する。

1. 松岡雄太 (AA 研共同研究員, 関西大学)

「モンゴル語の補助動詞と文法化—アスペクト的意味を表すものを中心として—」

発表者は、諸先行研究の定義に対し、児倉(2018)の定義に依拠しつつ、補助動詞を文法化の途上にあるものと位置づけ、本動詞が何らかの文法的意味を表すようになったもののうち、いまだその使用に制限があるものを補助動詞と認める。今回の発表では、現代モンゴル語ホルチン方言を対象に、アスペクト的意味を表す補助動詞のうち、特に動作の終了(完了、完遂)を表すいくつかの形の意味と使用制限の記述を行い、またそれらの体系化を試みた。その結果、baraqu と Garqu は、動作の終了に対するモダリティの有無という点において、同時に、baraqu と barGaqu 並びに Garqu と GarGaqu という自他のペアは、動作の終了限界に至るまでの過程に対するモダリティの有無という点において、それぞれ無標と有標の関係にある可能性が高いことを指摘した。また、各補助動詞の使用制限、すなわち本動詞としての語彙的意味の残存という観点から見たとき、自動詞に比べて他動詞は文法化が進んでいないように見えることを指摘した。

2. 角道正佳 (AA 研共同研究員)

[詳説] ハルハモンゴル語の第二音節以下の基底閉音節短母音—CC7VC9# について」

モンゴル語ハルハ方言の正書法において語末の7子音+9子音の連続間には挿入母音は不必要であるという拡大解釈をしていたために、7子音+母音+9子音の場合があることを先行研究では説明できなかった。語末で母音+7子音+母音+9子音の連続をする語は1語のみであるので、語末で子音+7子音+母音+9子音が生じる語を探すと、借用語を除いて128語存在する。音韻的、形態的に説明ができる語を除いても24語残り、これらは基底母音と

して指定しておかざるをえないものである。通時的に見ると、音節末子音を最大限 1 つしか許さない体系から最大限 3 つ許す体系への変化の過程で、d と s の機能が変化したことによって起こった結果であることが明らかになった。

以上 2 件の報告の後、今後の計画について確認し、次回は年末に河西回廊モンゴル諸語に関連する研究報告を中心に企画することを確認した。また、これまで同様、今回の資料もウェブサイト（下記）に置くこととした。（文責：山越康裕，敬称略）

<https://sites.google.com/view/ilcaa-mongolic/>